

仙人通信 85 大源太山(1598m)

大源太山は越後湯沢 IC方向から谷川岳方面に尖った穂先を現し、上越のmatterホルンの異名を持つ山である。梅雨の間の晴れ間をと思い、大源太川沿いに造られた林道の行き止りにある駐車場から、山頂をピストンする計画を立てた。

登山計画をポストに出し、8時半にスタートである。檜の林床はウツボグサ・トリアシシヨマ・トラノウ・白い釣鐘状のアリドウシやイワカガミの葉が埋め尽くす。瀬音を聞きながらの静かで平坦な道を30分程で、北沢に架かる丸太橋(現在は鉄製の足場板)だ。

登山道は川の右側となり、キヌガサソウや白いボンボリのカラマツソウが目立つ。清水峠・蓬峠方面の道標から10分ほどで、難所とされる渡渉点である。現在はトラロープを4重とし、石にしっかり固定され危険はない。沢の石は石英や長石に雲母等が混じった石英閃緑岩で谷川岩体である。黄色のマーカーに沿ってムラキ沢の横を5分程進むと、太いブナに囲まれた急登が始まる。粘土質の登山道は昨日の雨でぬかるみ、ステップの石も滑るため、沿って張られたトラロープは有効だ。オオカメノ木・ナナカマドの緑の実、透ける様な青い山アジサイ・赤い山躑躅が力をくれる。登り初めて1時間半、周囲の展望がやっと開け、ブナの間だから尖った大源太山頂が伺える。トラロープを頼りに更に20分、林の中を登ると、漸く視界が開け弥助尾根だ。弥助沢に向かい大きく山体がえくれて、その先端部が尾根路である。満花時期を過ぎたイワハゼ(アカモノ)が至る所で4mm程のお手玉状の赤い実を付ける。濃いピンクのヒヨドリソウ・ミヤマシグレや白いゴゼンタチバナ・オン

ダテ・オノエラン・黄色のニガナ・オトキリソウ・キスゲ・紫のジョウシュウアザミそしてイワハゼより葉が小さいコケモモもかわいい!!。最後の急斜面になると、白い綿を付けたミヤマヤナギ・クロマメノキに似た葉に覚めるような赤紫のピロード状の釣鐘をつけたヨウラクだ。横では岩の上にしがみつくように着いた土にピンクのヤマトキソウの群落やミヤマリンドウそして岩の隙間からキンレイカも開花の準備中である。狭い尾根筋にしがみ付き咲く花々が、イトオシク涙がでそう。幾つかの岩を乗り越え山頂に近付くと白い米粒大の花を付けた米躑躅が満開である。3時間10分で小さな山頂に辿り着いた。残雪の巻機山や朝日岳・尾根伝いの七つ小屋山や清水峠・武能岳・雲に山頂を隠す谷川岳・シン小屋の頭の先に尖った山頂の仙の倉と360°の展望である。私事であるが、わが祖先は、鎌倉時代の初めに数人を従えて越の国から武蔵の国の鶴見川上流の地に定着したと過去帳にはある。当時先祖は三国峠か清水峠を越したのであろうか、そんな様子を思い巡らした。登山中は、ずっとカッコ・ホトギス・ウグイスの鳴き声に癒され、山頂では誰にも邪魔されずに30分程憩う事ができ、最高の幸せを噛み締めた。芹洋子の「坊がつる賛歌」を口ずさむ余裕の持てた、ちょうど6時間の山旅となりました。(h 21. 7. 7)

山頂近く



山頂から谷川岳



ヨウラク

